

No.6	提 案 名：みんなのたまり場プロジェクト ～ 世代や属性を超えた温かい交流の場の提案 ～	
	提案団体名：宇都宮大学建築計画研究室佐藤ラボ	
	所 属：宇都宮大学 地域創生科学研究科・地域デザイン科学部	
	代 表 者：工藤 光一郎	指導教員：佐藤 栄治 教授
	メンバー 内田 瑞奈・渡辺 真央・面川 鳩太・久保田 萌・東條 有李・藤谷 明博・金 孝俊 中嶋 恒仁・平澤 賢・二木 楓香・竹澤 くるみ	

○ 提案の要旨

地域における互助の関係性が希薄化する中で、従来の自治会のあり方だけでは地域のつながりを再生・維持することが難しくなっている。この現状を踏まえ、現代に即した新たなかたちで互助の関係性を再構築することを目的とし、宇都宮市の既存の取り組み事例のヒアリング分析と、社会実験的検証を実施した。分析と検証を踏まえ、地域の誰もが目的の有無にかかわらず、利用・滞在できる「みんなのたまり場」を設置し、宇都宮市全体へ展開することを提案する。「みんなのたまり場」に地域の人々がふらっと立ち寄り、集い、顔を合わせ、交流を継続することで、「みんなのたまり場」が自然と地域内の縁を結ぶ役割を担い、互助の関係性が地域の中で育まれていくことを目指す。

1. 提案の背景・目的

かつて自治会等の地縁が担ってきた、地域における互助の関係性が希薄化している。自治会加入率の低下の背景には、世帯構成、ライフスタイル、価値観の多様化が進んだことにより、従来の自治会の仕組みや活動内容が、地域住民のニーズに沿えなくなってきたことがある。そのため、従来の自治会への加入促進だけでは、地域のつながりを再生・持続するには限界がある。そこで、かつて自治会が担ってきた「地域に互助の関係を生む役割」を、現代にあわせたかたちで再構築する必要がある。

一方で、デジタル技術の発展により、オンラインミーティングや SNS 等、場を異にしながら個々が簡単につながれるようになり、地理的・時間的な制約を越えて、多様な人々と情報や思いを共有することが可能になった。その反面、デジタルツールでのコミュニケーションは、「相手の感情を深く読み取れない」「深い信頼関係の構築が難しい」等、画面越しでは補えない身体性や非言語情報の重要性が浮き彫りになった。このようにデジタルツール上のつながりが促進するにつれ、「場を共有したリアルなつながり」が生む、顔が見える関係性・安心感の価値が改めて強く意識されるようになった。互助の基盤となるのは、顔の見える関係性・安心感から生まれる信頼関係である。この信頼関係はデジタル上の関わりだけでは育ちにくく、リアルな場での関わりを通じて醸成される。

そこで我々は、「互助の関係性を現代に即したかたちで地域に再構築すること」を目的に、ふらっと立ち寄り、顔を合わせ、交流を重ねることで、信頼関係を構築していくような地域の居場所「みんなのたまり場」の展開を提案する。

2. 提案の目標・課題「ほっこりした宇都宮～デジタル社会における温かい人間関係～」との関連

我々は、失われつつある地域の互助の関係性を現代に即したかたちで宇都宮市に再構築することを目標に、だれもがいつでも訪れることができる地域の居場所「みんなのたまり場」を宇都宮市全体へ展開することを提案する。将来的には「みんなのたまり場」が地域内の縁結ぶ役割を果たし、お互いの存在が安心感をもたらし、困ったときに助け合える関係性を形成することで、誰もが人とのつながりを感じながら安心して暮らせる「ほっこりした宇都宮」を実現する。

3. 現状分析

提案にあたり、市内で取り組まれている地域の居場所づくりに関する事業について情報収集を行った。そのなかで、世代や属性を問わずに利用できる居場所として開設されている「共生の居場所」に着目し、ヒアリング調査を行った。

3.1 「共生の居場所」の概要

「共生の居場所」は宇都宮市地域共生推進室が主体となって進める居場所づくり事業であり、「誰もが孤立せず社会とつながりが持てるよう、世代や分野にかかわらず誰もが集える場所」として市内 6 カ所に開設されている。開設・運営にあたり、宇都宮市から各運営団体へ要件が課され、活動に応じて補助金が交付されている。

宇都宮市地域共生推進室と運営主体 6 団体（表 1）に対して、「共生の居場所」の現状や課題等を把握するために、ヒアリング調査を実施した（表 2）。

表 1 「共生の居場所」運営団体概要

	ガンダラカフェ	おりーぶ village	ララカフェ	サロンみんなの保健室	Minnna のいばしょ	地域コミュニティ よりみちカフェ
場 所	江野町 11-6	長岡町 313-2	下荒針町 3473-23	伝馬町 4-30	陽東 4 丁目 18-30	氷室町 912-1
開設日時	毎金曜日 14:00-17:00	第 2・4 日曜日 10:00-14:00	毎水・木曜日 11:00-14:00	毎火・水・木曜日 13:30-17:30	毎木曜日 9:00-12:00 ※第 2・4 は -13:00	第 2,4 土曜日 10:00-13:00
居場所でやっていること	カフェ、悩み相談、利用者がやりたいことを自由に	利用者がやりたいことを自由に、お茶とお菓子の提供	利用者がやりたいことを自由に、お茶とお菓子の提供	レンタルルーム貸出、健康診断、健康相談	親子で楽しめるプログラム、ご飯の提供	ものづくりイベント、ワークショップ、蕎麦会、スマホ教室
運営団体	一社 Gumbo Design Products	NPO 法人うつのみやオリーブ	株式会社ララ	サロンみんなの保健室	とちぎ YMCA(公財)	市民団体なかよしひろばにこにてらす
団体の主な活動	アートカルチャーを盛り上げる、フリースクール事業、子どもの居場所	子どもの家（学童）、フードシェア、親と子どもの居場所、フードドライブ	総菜販売を中心とした会社事業、子ども食堂、コインランドリー、こどもカレーの提供	つなサポ、若い女性への支援、赤ちゃんの駅	全人教育、国際系活動（公財）、保育園、子どもの居場所・親と子どもの居場所（社福）、幼稚園・学校（学）	子どもの居場所
居場所スタッフ数	基本 2 人（全体 6 人）	2 人	20 人※対応できる人	6 人 + 相談員 13 人	2 人 + ポンティア 2,3 人	3 人
利用者数	基本 1,2 人 / 回	基本 1,2 人 / 回	2,3 人 / 月	想定 3 人 / 回	8 人 / 回	2,3 人 / 回

表 2 ヒアリング項目

行政	制度設計	「共生の居場所」事業化の経緯 「共生の居場所」の在り方の想定 審査・補助金交付に関して 広報について 評価方法・効果測定について 行っている支援について 受けている支援について
	その他	課題・展望 予想外だったこと等
	基本項目	施設所有状況や開設日時等
	団体特性	団体の概要について 「共生の居場所」以外の事業について 「共生の居場所」参入経緯・理由 「共生の居場所」参入による変化
	共生の居場所運営の様子	実施しているプログラムについて スタッフについて（属性、人數等） 利用者について（属性、利用目的等） 空間の特徴・利用状況について 地域や他の施設との連携について 受けている支援について 運営における課題
	その他	今後の展望等・（市への）要望

3.3 「共生の居場所」ヒアリング調査結果

(1) 宇都宮市地域共生推進室へのヒアリング結果

「共生の居場所」は、引きこもりを対象にした居場所事業を参考に制度設計されており、仕事を退職した人や引きこもりがちな人等、社会との接点が少ない人をメインターゲットに据えていることが明らかになった。また、運営団体の多様さに現れているように、主体となる運営団体の特色や得意分野を活かした、柔軟で意欲的な居場所づくりを望んでいることが分かった。

(2) 運営団体へのヒアリング結果

ほとんどの団体において、利用者の属性は、宇都宮市がメインターゲットとして想定している引きこもりがちな人・子どもが中心であることが明らかになった。多くの利用者は、一人で「共生の居場所」に訪れ、スタッフと 1 対 1 で会話して過ごしていた。全ての団体において、開設中に何か特定のプログラム等は実施しておらず、利用者が来たタイミングで利用者が望む過ごし方ができるようになっている。多くの団体が、運営を続ける中で、利用者が活発な交流や大人数の交流を望んでいないように感じており、目的を持たずとも気軽に利用でき、静かに過ごせるような空間が展開されていた。

運営上の課題として、大きく①金銭的な負担、②広報（居場所の周知）、③周囲との連携の 3 つが見られた。具体的に得られた意見は、①金銭的な負担：「今後も続けていきたいが、金銭的な負担が大きいため続けられない」「他の事業で出た利益を活動に回している状態である」、②広報：「必要としている人に情報が届いていない」「自分たちの力だけでは限界がある」、③周囲との連携：「専門的な支援が必要な利用者が来た時、何を具体的に行ったらいいか（自分たちでは）分からぬ」等である。

また、宇都宮市への要望として、「補助金の金額・使途を増やしてほしい」「（やりたい事業に関する情報や伝手を得るために）市役所内での横のつながりや情報共有を強化してほしい」「他団体とつなぐ役割をして欲しい」といった意見が散見された。

3.4 「共生の居場所」の調査を踏まえた「みんなのたまり場」の位置づけ

運営団体と宇都宮市に対してヒアリングを実施した結果、「共生の居場所」は制度のはざまにいる人を支援することを目的に、社会との接点が少ない人の社会参加のファーストステップの場としての役割を担っていることが分かった。本提案にある「みんなのたまり場」は、地域に互助の関係性を育むことを目的としているため、共生の居場所とは異なる視点から設計されている。そのため本提案は、多人数・多世代の関わりを生み出す別の仕組みが求められると考えた。一方で、目的の有無にかかわらず利用・滞在できる点に着目し、後述の検証に活かした。

4. 社会実験的検証「みんなのたまり場 タキヤ」の実施

4.1 検証の趣旨

提案する「みんなのたまり場」の有効性を検証するために、我々が主体となって実際にプログラムを組み、市内の施設を借りて、地域や学生ボランティアを巻き込んで社会実験的検証を行った。本検証の目的は、①地域に互助の関係性を再構築する「みんなのたまり場」に必要な要素の検証、②利用者の世代や属性、利用状況から居場所の効果を見ること、③実際の開設・運営に係る経費や広報、利用実態から運営上の課題を把握することである。

4.2 実施概要

(1) 実施場所、タキヤについて

宇都宮市峰地区にある旧酒屋であったタキヤ（宇都宮市峰3丁目14-2）で行った（図1）。2023年4月から宇都宮市が行う宮っこの居場所「子どもの居場所 タキヤ」として利用されている。小学校の通学路に面しており、高齢者と大学生が多く住んでいるエリアである。



図1 タキヤの写真

(2) 実施期間、プログラムについて（チラシ、プログラム図）

ポスターおよびプログラムを図2に示す。実施期間は8月18日（月）から22日（金）までの10:00～19:00（19、21日のみ21:00まで）である^{*1}。

みんなのたまり場
タキヤ

● 2025.8.18(月) - 8.22(金) 旧酒屋さんだった場所が、今年の夏だけ「ちょっと変わった居場所」になります。こども、大人、お年寄りまで、いろんな人がゆるく集まる場所。「誰かとちょっと話したい」「新しい仲間で会話したい」「いつもお譲ったことがしたい」「学生に連絡相談がしたい」そんなときは、タキヤに集合!

● 2025.9.1(月) - 9.5(金) OPEN 10:00 - 19:00

▼2025年8月18(月)～8月22(金)のプログラム表

	10:00	12:00	13:00	15:00	17:00	19:00	21:00
8/18 (月)	スマホ教室	お昼休憩	カフェタイム	だがしやさん	宇大部横断トーキー		
8/19 (火)	カフェタイム	お昼休憩	映画鑑賞会	わりばしで橋をつくろう!	タキヤ勉強カフェ		
8/20 (水)	ペットボトルキャップを使ってダンシングゲームを作ろう!	お昼休憩	カフェタイム	子どもの居場所	大学生と一緒に勉強!		
8/21 (木)	カフェタイム	お昼休憩	カフェタイム	縁日で世界を探検しよう!	タキヤ勉強カフェ		
8/22 (金)	今後の峰地区について考えよう!	お昼休憩	ダムカードゲーム	ボードゲームカフェ	大学生と一緒に勉強!		

▼2025年9月1(月)～9月5(金)のプログラム表

	10:00	12:00	15:00	17:00	19:00	21:00
9/1 (月)	スマホ教室	お昼休憩	カフェタイム	スマプラ大会	宇大建築研究室座談会	
9/2 (火)	カフェタイム	お昼休憩	カフェタイム	海外お茶会～インドネシア編～	タキヤ勉強カフェ	
9/3 (水)	カフェタイム	お昼休憩	お野菜販売	子どもの居場所	大学生と一緒に勉強!	
9/4 (木)	カフェタイム	お昼休憩	カフェタイム	タキヤから逃げろ! 防災WS	タキヤ勉強カフェ	
9/5 (金)	カフェタイム	お昼休憩	海外お茶会～韓国編～	ボードゲームカフェ	大学生と一緒に勉強!	

図2 「みんなのたまり場 タキヤ」のポスターと実施プログラム

4.3 検証で設定した4要素

誰でも利用できることを前提とした上で、地域の互助の関係性の再構築に資するために、「みんなのたまり場」に必要だと考えられる4要素を、現状分析、自らの経験²、既往研究³をもとに設定した。本検証では4要素をコンセプトとして、開催内容・日時、プログラムを計画した。

①常設性：地域の人から居場所として認識され日常的に利用してもらうためには、目的がある人もない人も、ふらっと立ち寄れるような「いつでも行ける」ことが大切である。そのため、本検証でもイベントによる一時的な場所の開放ではなく、常時的な開放を行った。

②地域特性を活かしたプログラムの実施：プログラムやイベントを実施することで、居場所の周知や行くきっかけづくりに効果があると考えた。今回の場合、既にタキヤが「子どもの居場所」として子どもにある程度認知されていたことを活かし、子どもを基点として他の世代を引き込むプログラム編成を意識した。具体的には、子どもにアプローチするプログラム「だがしやさん」等、その他特定の世代にアプローチするプログラム「スマホ教室」等、世代間の交流を期待し特定の複数世代にアプローチするプログラム「大学生と一緒に勉強！」等、世代を特定せずにアプローチするプログラム「ボードゲームカフェ」等である。また、プログラムの前後関係を調整し、プログラムの入れ替え時に世代が混ざることで、多世代交流が発生することを期待した。

③多目的で利用できる空間づくり：地域の様々なニーズや課題に対応するためには、多目的で利用できる空間づくりが必要である。今回の場合、机や椅子、本棚等の可動性の高い家具でゾーニングを行い、プログラムや訪れる人に応じた空間利用ができるようにした。

④様々な広報媒体の活用：世代や属性ごとによって身近な情報媒体は異なるため、より多くの世代にアプローチするには様々な媒体を活用することが重要である。今回の場合、既にタキヤが構築していた地域ネットワークを活用し、峰地区まちづくり推進協議会が運営する公式LINE、峰地域の回覧板、宇都宮市立峰小学校でのチラシ配布を行った。また、宇都宮市立陽東小学校、宇都宮市立陽東中学校、宇都宮市立旭中学校にアポイントを取ってチラシを配布、webサイト、Instagramでの広報も実施した。

4.4 効果検証方法

本検証を定量的に評価するために、行動観察調査を実施した（図3）。

行動観察調査概要		
目的	「みんなのたまり場」実施時の、利用者の利用状況、交流の様態を把握するため	記入ルール ・アルファベットで利用者を区別 ・立位→○、座位→□ ・体の向きを矢印で記入 ・具体的な行動を記入 ・関わっている人同士を囲む
調査場所	TAKIYA(宇都宮市峰3-14-2)	記入例 テーブル ソファ C ボードゲーム しながらおしゃべり
調査内容	利用者の入退室時刻、属性、滞在場所とその行動、利用者・スタッフの交流様態の把握	
調査方法	開設時間中15分ごとに、利用者の滞在場所・行動・姿勢・顔の向き等を平面図に記録	
調査期間	2025年8月18日～8月22日 10:00～19:00(火木のみ～21:00)	

図3 行動観察調査の概要と記録用平面図

4.5 検証結果

(1) 行動観察調査の結果

まず、利用者の人数と推移について分析する（図4）。時間帯で見ると、1週間を通して午前中の利用が少ないことが分かった。15時から17時の時間帯が、一番利用者が多く、ピークは月曜日16時の28人であった。利用者の世代・属性で見ると、全体を通して大学生、小学生以下の利用が多くを占めていることが分かった。高齢者の利用が延べ利用人数4人と一番少なかった。またプログラムがない時間帯と比較して、プログラムがある時間帯に利用者が集まっている傾向があることが読み取れる。「だがしやさん」「宇大学部横断トーク」「子どもの居場所」「ダムカードゲーム」の順に利用者が多かった。

次に、空間の使われ方と利用者の交流の様相について分析する（図5）。同じ属性同士のかかわりでは、地域の中学生たちが、プログラムがないカフェタイムに来て談笑している様子や、子

連れの親同士が立ち話をする様子が観察できた。属性を超えたかかわりでは、高齢者が子どもに工作を「教える立場」である様子と、大学生からスマホの使い方を「教わる立場」である様子等が観察できた。空間の使われ方として、8/18 を例にとると、1 日を通して中央エリアが活発に利用されていることが分かる。「だがしやさん」があった 15 時-17 時は、駄菓子を売っていた中央エリアから、座って皆と食べたり話したりしやすい小上がりエリアへと人が流動している様子が読み取れる。その後に続く「宇大学部横断トーク」の間も、「だがしやさん」を目的としてやってきた子どもが大学生と談笑している様子が観察できた。プログラムの入れ替え時に世代が混ざることで、多世代交流が発生することを確認した。

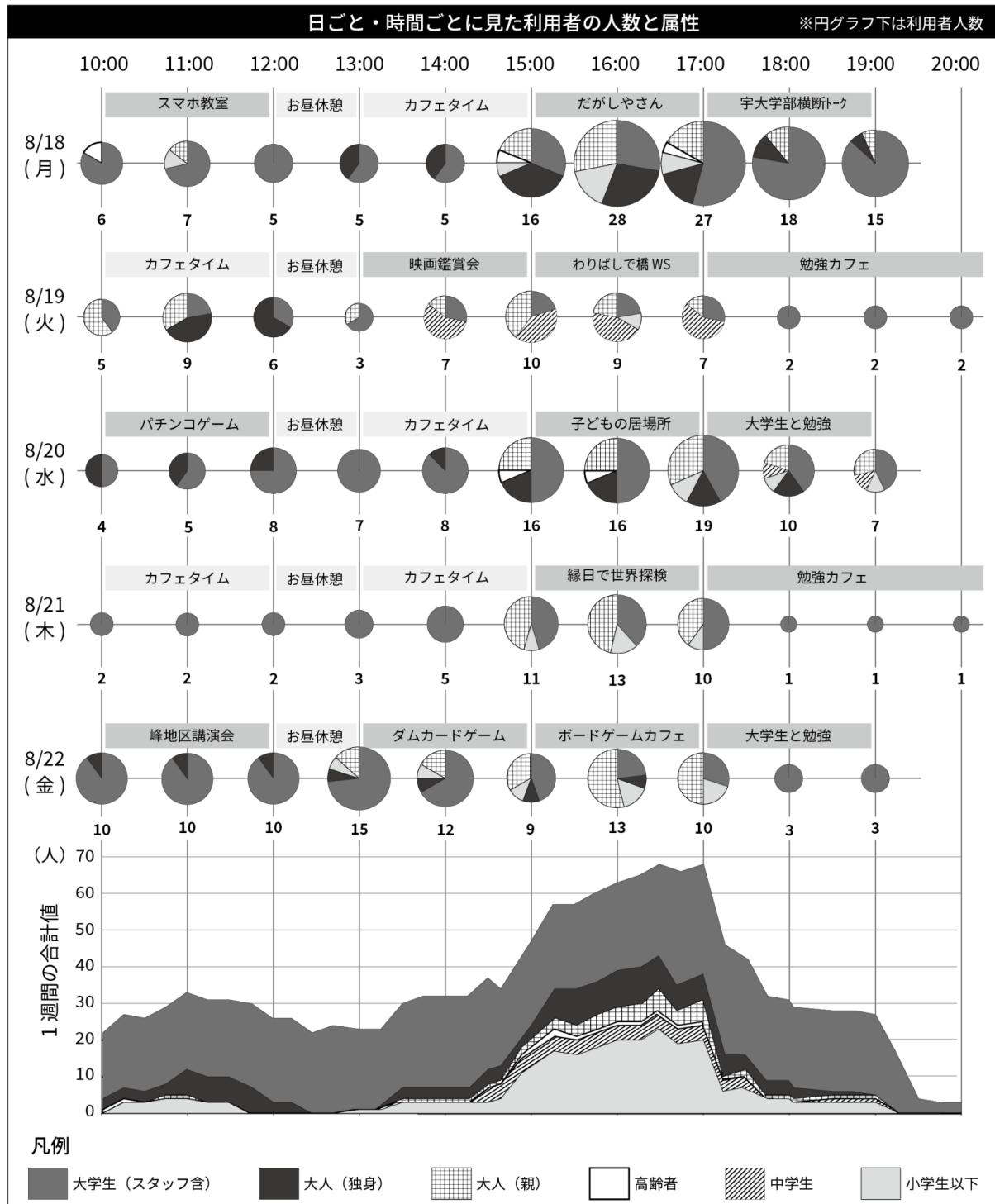


図4 利用者の属性と人数の推移

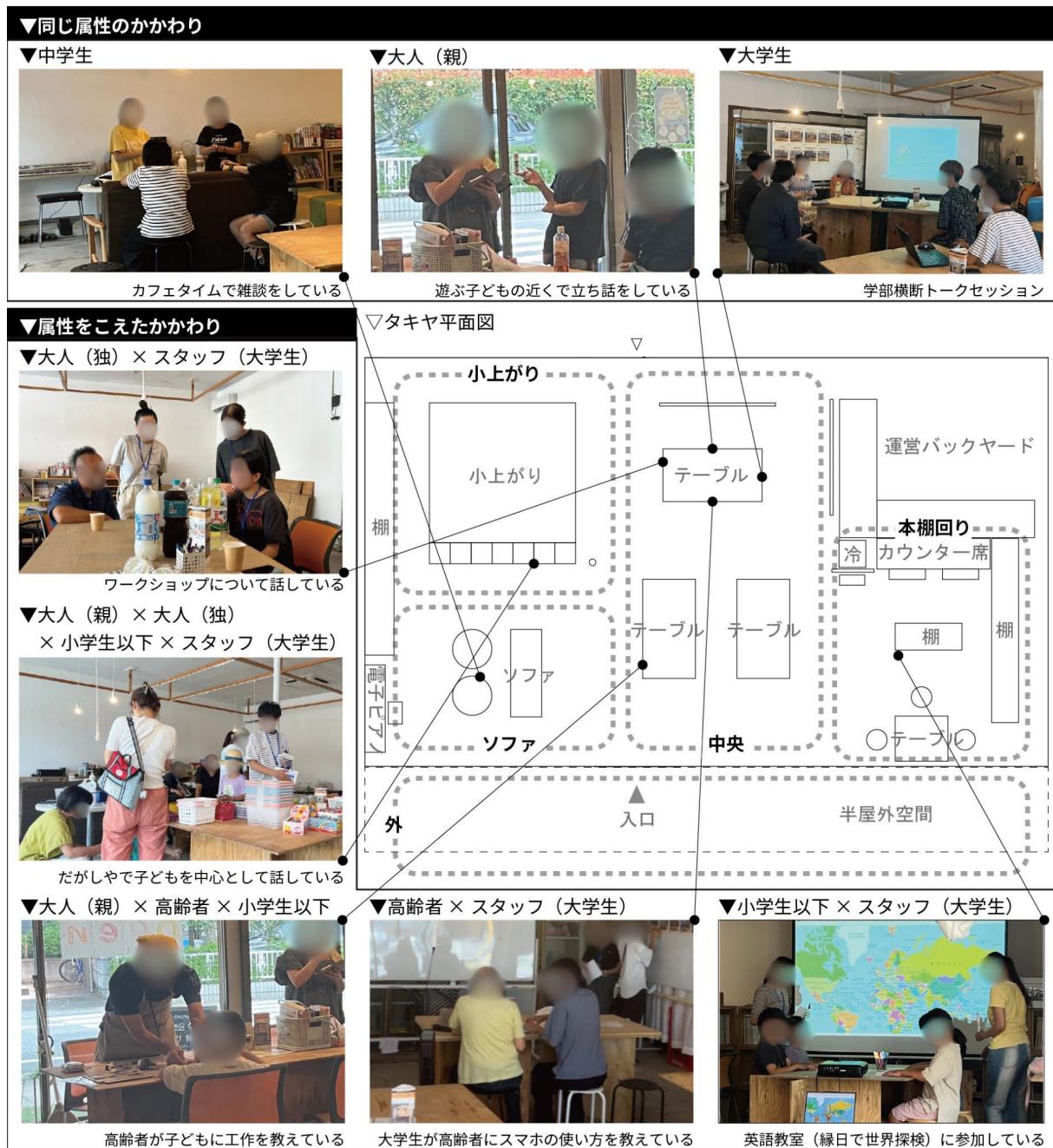


図 5 利用者の交流の様相

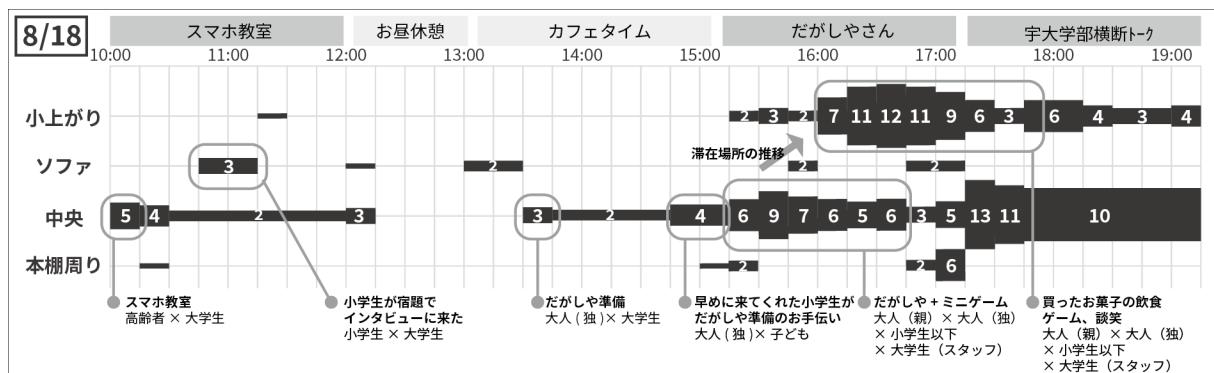


図 6 利用者の滞在場所の分布

(2) 設定した4要素の評価

- ①常設性:設定したプログラム以外の時間でも利用者が来て、談笑したりゲームをしたりする様子が見られた。また、プログラムを目的に来た利用者がその後も滞在している様子が確認できた。
- ②地域特性を活かしたプログラムの実施:子どもと大学生にアプローチするプログラムの時間帯が、一番利用者が多く集まり、延べ利用者数もこの2世代が多かった。一方で、高齢者の利用は少なく、高齢者にアプローチするプログラムよりも、子どもにアプローチした「だがしやさん」「子どもの居場所」での利用が多かった。
- ③多目的で利用できる空間づくり:中央エリアは入口付近で広く開放的なこともあり、プログラム時に活発に使われることが多かった。一方小上がり・ソファエリアは、座れる小さな空間であることから、カフェタイム時に談笑したりゲームをしたりするときに好んで使われることが多かった。また、プログラムの内容や人数に合わせて家具の配置を変え、柔軟に空間を作り替える様子も確認できた。
- ④様々な広報媒体の活用:Instagramやwebサイト等の不特定多数に向けたオンライン上の広報は、手軽に素早く多くの人にアプローチできる反面、地域住民に届いているのか分かりにくいことが課題であると感じた。回観板や学校でのチラシ配りは、労力と信頼関係を必要とするものの、アプローチしたい地域・世代に確度高く広報することができるという良さがある。双方の特徴を理解し、組み合わせることによって、より効果的な広報ができると感じた。

(3) その他

準備段階:広報にあたり、大きな労力と時間、費用を伴った。既にある地域ネットワークの活用がなければ、様々な広報媒体による広報は難しかったと考える。また本検証に際し申請した補助金が採択されず、資金調達の面で困難を感じた。一週間と限られた期間であったため、必要備品を借用で貰い、人員は無償での協力を仰ぎ、最終的に経費は1.9万円まで抑えることができ検証が可能となった。しかし、本来は備品調達や人員確保には購入費用や人件費がかかるなどを鑑みると、年度を通して常設することは難しく、運営側の資金面での負担が大きいことが分かった。

実施段階:一方で、常設の居場所には一定の利用需要が確認できた。また、行動観察調査等の定量的評価に加え、運営側から見た定性的評価としても顔の見える関係性・安心感から生まれる信頼関係の醸成が期待できる。

その他:場所の確保の困難さが明らかになった。また地域の方からは、高齢者は新しい取り組みに対して関わりが見られるようになるまで期間を要するのではないかとのご指摘を頂いた。本検証期間では高齢者の利用者数は少なかったが、継続することで来てもらえる見込みがある。

5. 施策事業の提案

これまでの調査、検証を踏まえ、施策事業「みんなのたまり場」プロジェクトを提案する。本施策事業は、「みんなのたまり場」を宇都宮市の各地域に設置することで、「みんなのたまり場」が地域の人と人との縁を結ぶ役割を果たし、互助の関係性が地域に再構築されることを目指すものである。

5.1 「みんなのたまり場」プロジェクト

「みんなのたまり場」とは、地域の誰でも、いつでも、どんなときでも、目的の有無にかかわらず、利用・滞在できる地域の居場所のことである。この「みんなのたまり場」に人々が集まり交差していく中で、地域の縁が結ばれていく。その縁が次第に地域に波及して行き、日常的な声かけやちょっとした見守りといった小さな互助が芽生え、地域で育まれていくことを期待する。

5.2 「みんなのたまり場」プロジェクトのしくみ

プロジェクト推進にあたり、宇都宮市と各地域の「みんなのたまり場」が連携する仕組み「たまり場委員会」を結成することを考えた(図7)。まず、地域ごとに「みんなのたまり場」づくりを担う団体や地域住民、自治会や大学生等の関係者を手上げ制で募り、宇都宮市が「たまり場委員」として認定する。委員会ははじめに、対象とするエリア、地域住民の属性、地域資源・課題・ニーズを把握する。そのうえで、委員会構成員の特色や得意分野を活かしながら、地域特性を鑑みた「〇〇地区 みんなのたまり場」の運営方法や活動内容、地域資源(空き家等)の活用を検討・設計する。委員会において宇都宮市は、伴走者として、行政内外の連携調整や情報共有、制度活用の支援等、地域単独では難しい部分を支えるパイプ役を担う。また必要に応じて、各自治会・NPO法人・民間の専門機関等や教育機関を招き、各たまり場の特性やニーズに応じて

助言できる体制を整える。また、委員会が「みんなのたまり場」を地域に長く続けていくために、宇都宮市は「みんなのたまり場」を開設・運営するための金銭的援助や「みんなのたまり場」の対外発信、空き家や公共施設の利活用といった金銭的・情報的・リソース的支援を行い、「みんなのたまり場」が地域に根付くための環境を整える。さらに、宇都宮市と市内のたまり場同士が横につながる「たまり場全体会議」を定期開催し、活動や課題の共有、学び合いの機会を設ける。これにより、地域を越えて「みんなのたまり場」の横のつながりが形成され、宇都宮市に広く互助の関係性が波及していく。

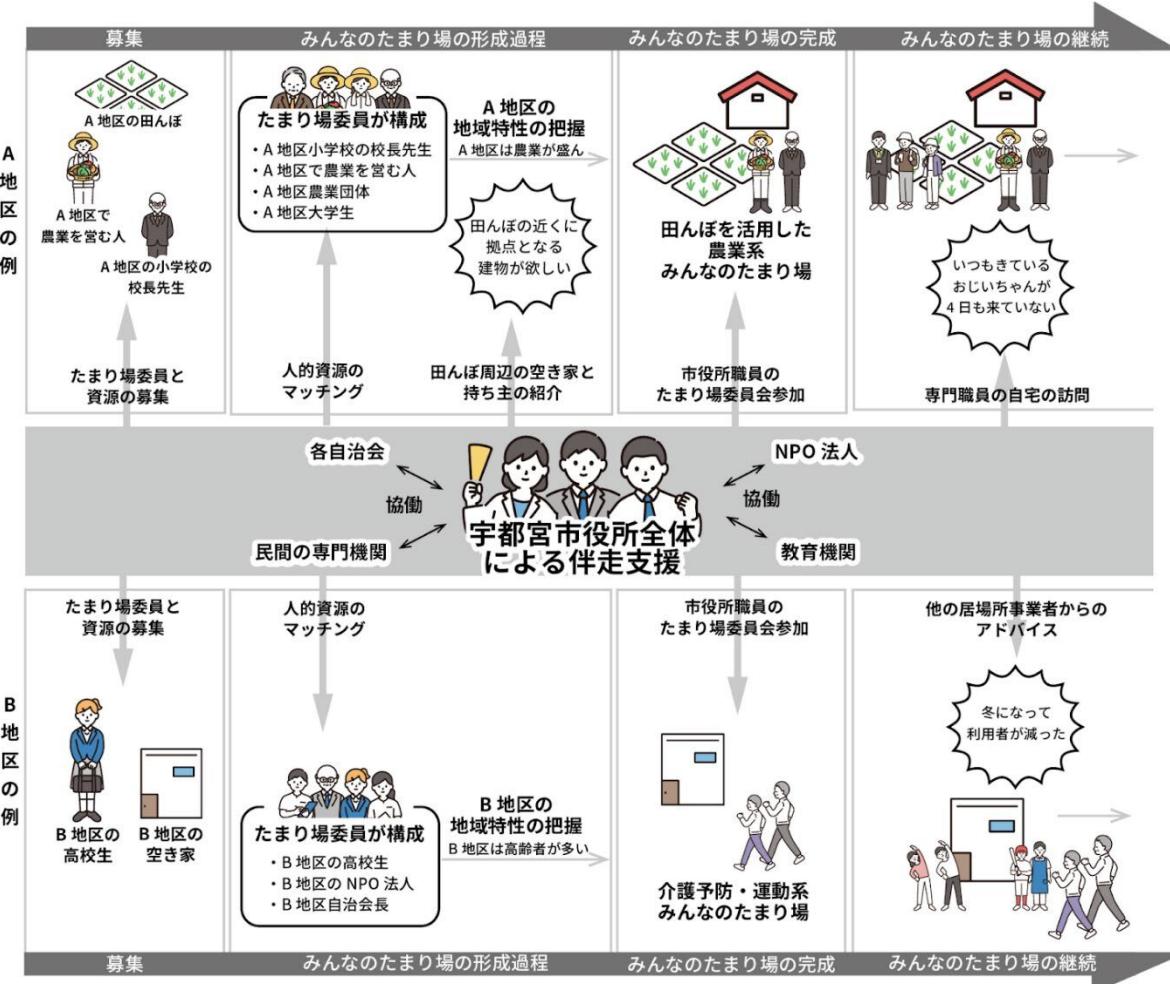


図7 「みんなのたまり場」プロジェクトのしくみ

5.4 「みんなのたまり場」の効果・展望

「みんなのたまり場」が地域に根づき、持続的に展開していく仕組みを構築することにより、自然と人々の縁が結ばれ、お互いの存在が安心感をもたらし、困ったときに助け合える関係性を形成する。この互助の関係性が、地域の中で育まれていくことで、誰もが人とのつながりを感じながら、安心して暮らせる「ほっこりした宇都宮」を実現する。

【補注】

- *1 9月1日（月）から5日（金）も実施予定だったが、施設側の都合により中止となった。
- *2 工藤はタキヤの代表として宮っこの居場所を運営しており、経験をもとに4要素を設定した。
- *3 内田はドイツの事例:多世代の家について研究しており、経験をもとに4要素を設定した。

【参考文献】

- 1) 宇都宮市地域共生推進室, 利用してみませんか? 誰もが集える「共生の居場所」 (チラシ), 2025年.
- 2) 宇都宮市地域共生推進室, 共生の居場所ライトリンク補助金交付要綱, 2024年.